

第5章 1

さいがい わたし ささ 災害から私たちの生活を支える ②

副読本 42 - 43 ページ

年 組 番 名前

3 復旧・復興に関わった人たちの声、巡視船「まつしま」の乗組員と緊急スクールカウンセラーの資料を読んで、感じたことを書きましょう。

(1)巡視船「まつしま」乗組員

(2)緊急スクールカウンセラー

第二管区海上保安本部宮城海上保安部 巡視船「まつしま」乗組員

長期のしよ戒業務も最終日に近づき、そろそろ基地へ帰れると思ったまさにその日の出来事だった。激しく長い揺れが収まりラジオをつけると「大津波警報」と放送されていた。当時、「まつしま」は福島県相馬港内で錨を降ろしていたので、緊急出港した。

津波到達予想時刻を過ぎててもほぼ海面に異変はなく、ほっとしたのも束の間、「まもなく津波第1波が到着する、衝撃に備え身体を保持せよ!」という船内放送。私が操舵室へ入ると大津波が迫ってきていて、まるで一面「壁」が向かってくる様だった。私は姿勢を低くして手すりにつかまり身体を保持した。「もしかしたら転覆するのは…」というとても怖い恐怖を感じた。

救助のために沿岸へ戻った時に見た光景は悲惨だった。海域一面が油やがれきまみれて、何軒もの家が丸ごと海に流されて屋根だけ海面に浮いているという光景は、この先もずっと忘れることができないだろう。

行方不明者捜索において、浮かんでいるがれきの隙間から行方不明者を数多く発見したが、助けられなかったことへの悔しさを感じたり、また、我々自身も被災したりと、とても辛い思いをした。

しかし、避難生活をしている方々からのたくさんの励まみや、被災しても必死に業務に当たっている「まつしま」乗組員の姿を見て、「なんとか助かった我々はしっかり任務を果たさなければいけない」と思い、今も行方不明者捜索を続けている。



写真提供:第二管区海上保安本部

▲巡視船「まつしま」(当時)

緊急スクールカウンセラー (兵庫県より)

震災後、南三陸町の小学校に勤務しました。水道が復旧するまで大活躍した給水タンク。そこにはいつも自然と人が集まっていたそうです。ある先生は「早く水が出てほしいと思っていたけど、もうこのタンクを使わなくて済むと思うとさみしい。」と話していました。人と人のつながりも不便な生活を支えていたのです。

大きな災害は人々に多くの影響を与えます。生活だけでなく、気持ちも変化します。でも、それは当然のことです。阪神・淡路大震災のとき、私はまだ大学生でしたが、まさか自分が被災地を訪ねることになるとは思ってもみませんでした。人には、つらい体験や悲しみから回復する力があることを伝えていきたいと思っています。



▲休み時間でのふれあい